
視線の交錯あるいは視線の占有 ——青山七恵「窓の灯」をめぐって——

疋田 雅昭

○ 遅れてきたポストモダンあるいは感性として蘇る思想

「見る」ということは、実はかなり根源的な近代的命題である。それは、人間が外界の情報のかかなりの部分を視覚に負っているという事実のみならず、あらゆる五感をもって我々は世界を「見」ようとしているにもかかわらず、その起点となる自身を「見る」ことが出来ないという矛盾から始まる命題である。哲学史における主客（不）一致問題や実存的諸問題。これらは、すべてこの系譜の中にあると言っても良い。

近代人は、世界を解釈する中心に自分を置く代わりに、中心については敢て問わないという態度を「発明」することによって、この問題を「解決」して来た側面を否定出来ない。その意味では、精神分析が対象とする諸症状も、また精神分析学という学問自体も、近代的産物である。

ここに召喚したテキスト、青山七恵「窓の灯」（『文藝』二〇〇五年冬季号）は、二十歳に満たない一般女性の自己認識（他者認識）をめぐる物語である。物語内容だけ捉えれば、若い女性のアイデンティティ・クライシスをめぐる物語とみなされてしまうかもしれない。だが、ここで描かれる世界との不和は、単なるアイデンティティの喪失や不確立といった、繰り返される典型的な若者像とは異なっている。異なっていながら、主客問題における現代思想的な流れと軌を一にしている面がある。

物語は以下のような印象的なシーンから始まる。

カーテンが揺れている。

蛍光灯の白い灯に満ちた、少し横長の窓。

その部屋のテレビからもれる大勢の男女の声は、夜の空気にとけて私の耳まで届く。彼らはいったい何を笑うんだろう。粗いレースのカーテン越しの、はっきりしない横顔。その人は時折声をあげて笑う。すると、私の口元も少しだけ緩む。

（9頁）

見られる客体となる「向かいの人」が笑えば、覗く（見る）主体である方も笑う。この客体の笑いは、テレビの中にある「大勢の男女」の笑いから伝わってきたものである。

もちろん、覗く主体にも、このテレビの音は聞こえている。しかし、その内容までは聞き取ることができない。内容もわからず、ただ、「笑い」だけが伝達されているのである。

「覗く」という行為。これは、少なくとも双方向ではないという意味では、「コミュニケーション」とは言えない。しかし、結果的に主体に何らかの感覚を発生させるこの行為は、客体の「解釈」を伴う点で、表象を受容している時と同種の感覚を含んでいる。

さらに、ここで主体に生じる感覚は、単純に「伝達」されたとも言い難い。客体が「笑」っている感覚は、それを「覗く」主体にとって、「怒り」や「悲しみ」として結果的に認識されることも少なくないからだ。だが、客体の感覚の内実が分かり得ない中で、何故か主体がその感覚を引き受けてしまうことも、我々は日常の中から経験している。でなかったら、架空の物語の中に共感をおこす我々の感覚はあり得ないものになってしまう。

「生」「性」「笑」などといった、この物語で「覗く」主体が、結果的受け取っている、または主体の内部に事後的に生じている感覚は、生得的に有していた訳ではないという意味で、この主体の中では不可解な感覚である。これらの感覚が生得的な部分よりも習得的な領域に覆われていると考えるとき、それは確固たる輪郭をもつものではなく、むしろ、先行する何か（誰か）から学び（真似び）ながら、事後的に追認してゆくしかない、という事態が現出する。

むしろ、デリダが主張する（差延）ように、その先行とは常に別の先行が想定されてしまうわけで、結果的にこの思考は、起源論とは対立した位置にある。こうした、成熟した近代、もしくはポストモダン的な感覚が、若い世代の感性の中に可視化されつつあるのが、ゼロ年代という時代ではなかったのか。

しかし、「注目すべきは語り手／主人公の女性が覗き見行為の主体であること。女の子のピーピング・トム（覗き見常習者）を描いた、本邦初の小説家かもしれません」という物語内容に注目した斎藤美奈子や、「映像的美しさ感じさせる。加えて、文章に清潔感を漂わせる。その中に時折、官能性を滲ませる。意図して出来得る作業ではなく、偏に彼女の素質の成せる技であろう」と若き女性の文才を評価する田中康夫の第四二回の文藝賞選評は、どちらもこのテキストへの典型的な向き合い方であると同時に、不可避に何かを覆い隠してしまう態度である気がしてならないのだ。

平易で軽快な物語の中に溶け込んでしまっているように見える近代的命題。本論は、テキストの精読を通じて、先のような「態度」が溶かしきれなかった何かを、新しい世代の「感性」として、可視化させようとする試みである。

1、客体としての「姉さん」あるいは生まれ変わる物語

小説は、向かいの男性を覗いている場面から始まる。

向かいの人が引っ越してきたのは一ヶ月ほど前で、それまでは部屋の中を裸で

歩こうが、隣の部屋で姉さんが男を連れ込んでいろいろやっというが、何にも遠慮しなくて良かった。お店の上には私たちしか住んでいないのだから。

(10頁)

客体となる「向かいの人」と見る主体は対等の関係ではない。斎藤美奈子の指摘の様に、確かにこれは「ピーピングトムの物語」であると言えるからだ。「向かいの人」は一方的に見られる客体であり、見る主体は一方的に「覗く」主体である。また、同性である隣の部屋の姉さんの存在は、「私たち」と一括されその間には、物理的なそれ以外には、何の「壁」も存在していないように読める。

しかし、この「何も遠慮しなくてよかった」という一節には注目しておくなくてはならない。物語は、「向かいの人」の出現から始まっているのだ。テキスト全体も、「覗く」場面から始まり「覗く」場面で終わるという円環構造をなしている。「向かいの人」の出現は、結果的に物語の主体を変容させているのだ。この物語において、まりもに自由に内的焦点化出来る語り手と語られるまりもの間には、ある種のアイロニーが生じる瞬間があり、単なる透明な自己語りと捉えることは出来ない。

隣のミカドの存在を気にしなかったことの例として「男を連れ込んでいろいろやっという」ことを挙げていることは、ミカドの存在を性的なそれとして強く認識するようになる後の主体との差異を逆照射している。

私の部屋のちょうど真向かいにあたる二階の真ん中の部屋だけは、それまで誰も住んでいなかった。中国人と元クラスメイトの部屋はいつでもカーテンが閉まっていて、こちらを覗き見るような気配もない。それをいいことに、少し暑くなってからは常に窓全開、レースのカーテン一枚で、私は着るものにも全く気を遣わずに生活していたのだった。

(11頁)

向かいの三つの部屋は全て男性の部屋である。男性の部屋と向かい合う女性たちの部屋というジェンダー的な対置に加え、「向かいの人」の特性は、「中国人」と「同級生」という両隣との差異によって決定付けられている。それは、どちらも「こちらを覗き見るような気配もない」客体である。ただし、「こっちの視線を意識しているらしい」「中国人」も、「顔見知り」だが「挨拶する」なんてことのない「同級生」も、こちらを「覗き見」することもないが、同時に自身が覗き見られることをも拒絶している。

ぎしぎしと嫌な音をさせて向かいの雨戸が開かれたとき、鏡の前に立つて眉毛を抜いていた私は、反射的に窓辺に駆け寄って厚いカーテンを一気に閉めた。隙間から覗くと、向かいの雨戸はまだ十センチほどしか開いていない。私は、ああ、いやだ、うちが丸見えじゃない、と思ったきり、真昼に電気をつけてまた眉毛を抜き始めた。

(11頁)

当初、「鏡の前」に居た主体の視線は自分自身であった。鏡と見つめ合う主体と客

体の間には、この時点で「外部」は存在しない。そんな視線に支配される鏡像的關係を破壊するように、雨戸の「音」が介入して来る。向かいの雨戸の音が、こちらを「覗く」かもしれない主体の存在を知らしめて、自らの身体が見られる客体になる可能性を意識し始めるのだ。

「向かいの部屋、誰か引っ越してきたみたい」
と報告すると、彼女は全然興味なさそうに、
「へえ、そう」
と眩いだけだった。私は少し待って、付け加えた。
「姉さん、カーテン閉めたほうがいいよ」
姉さんは神経質そうなまなざしで、厚い唇に口紅を塗っている。じっと見ていたら、鏡の中の彼女と目が合った。
「テーブル片付けてきて頂戴」

(12頁)

自らを「覗く」かもしれない主体の出現にミカドは全く関心を示さない。話を聞きながら「神経質そうなまなざし」で化粧するミカドの視線の先も、おそらくは自身の顔である。同じ「鏡の前」に居ながら、自身が見られる客体であることなどは、まったく意に介していない。「テーブル片付けてきて頂戴」という台詞からは、「目が合った」という「事実」すらも、まりもの一方的な判断であったように思われる。ミカドとは誰から見ても「見られる」客体ではあるが、同時に「見られる」ことを気にしない主体である。

ふと窓の外を見ると、向かいの一階に住んでいるおばあさんが寝巻き姿で雨戸を閉めているところだった。そのまま目を上げると、新参者の部屋には灯がついていた。窓は開いているようで、レースのカーテンが揺れている。

電気をつけてレースのカーテンだけなんて、なかなか無防備だ。私の部屋の電気がついたら、少しは気を遣うだろうか。

(13頁)

物語において「カーテン」は視線の拒絶の象徴である。だが、「レースのカーテン」がその機能をなすのは、外の日差しが明るい日中だけである。夜の部屋に灯が点っている時に限っては、むしろ外部からの視線を一方的に受け入れてしまう。

姉さんはお金を数え終わったらしく、いつの間にか悠々と煙草をくゆらせている。カウンターの奥で少し疲れた顔をして、頬杖をついて、白い煙にまかされている姉さん。焦点の定まらない真っ黒な二つの瞳は、お守りの中身をつい覗いてしまったような、とつてもいけない気持ちにさせる。私は少し離れたところから、ぶしつけなほど真剣な視線を姉さんに浴びせた。

「今日は誰か来るの？」

そう聞くと、姉さんは少し笑って、ふうっと長い煙を吐き出した。

「今日は来ないけど、近々」

(15頁)

どこまでもミカドには「見られる」という意識が感じられない。また、「焦点の定まらない真っ黒な二つの瞳」は、やはり彼女が「見る」主体ではあり得ないことを語っているようでもある。だが、「今日は」という表現に暗示されている、既に遅い時間帯になり、店の売り上げを数える頃合いになってまでミカドに「化粧」をさせているものの存在は、この時点ではまりもに意識されてはいない。

私は彼女のミニスカートから伸びた、薄桃色のふくらはぎに眩いた。カウンターに寄りかかっておじさんたちの愚痴を聞いている姉さんが愉快地笑うたび、大きなお尻がぶるんぶるん揺れる。

(19頁)

「姉さんの体はうまくできている」と思うまりもにとって、彼女への視線は性的なものが伴ったそれである。だが、それは単に男性的な視点に則ったものとは異なる。

彼女の小さな悲鳴を聞いて喜んでいるおじさんたちは、まるで小学生みたいに幼稚で、かわいそうな奴に見えた。そんなとき、姉さんのピンヒールのつま先は、決まってゆっくり床をつついていて、カウンターの外では聞こえないそのリズムを、私だけは知っている。最初にそれを発見したとき、背筋がぞっとするような居心地の悪さを感じた。次の瞬間やってきたのは、なぜか誇らしい優越感だった。

(19頁)

カウンターの内側からミカドを見ることができの特権的な位置は、からかわれている女の方が、実は「地位」や「家庭」のある男達を「かわいそうな奴」や「くだらない存在」に顛倒してしまうという二面性を一望できる場所である。さらに、ここでまりもが「見て」いるのは、単なる映像ではない。「小さな悲鳴」で男達を優位に立たせて喜ばせていながらも、男達から見えない足元の「ピンヒール」では違う「リズム」を刻んでいるというのだ。まりもは、常に「見て」いながらもよく「聴く」主体でもある。

私は姉さんの一挙一動を注意深く観察して、よく見定めようとする。すると、姉さんの一つ一つの言葉や立ち居振るまいは、「女の人」の見本として私の頭に日々少しずつ刷り込まれていく。そしてそれは、ほとんどやみくもな羨望と交わり合って、そのまま体の深くに沈んでいくのだった。

(20頁)

まりもにとって「女の人」の見本とは、客／店員、男／女、上位／下位といった様々な序列を顛倒させてしまう存在である。だが、実はこの「羨望」のまなざしこそ、行為の「主体」であるミカドを一気に「客体」化してしまう、暴力的な視線でもある。さらに、この暴力の矛先は、「主体」の座を奪い取ったかに見える自身の身体へと向かっている。

「海老フライにしようか」

「え……」

「海老フライ」

階段を下りるなり、姉さんはそう言い切った。

「なんで……」

「食べたいから」

「姉さんがいいなら、いい」

姉さんは、あんたは、と言いかけて、私の手をひょいと握った。姉さんの白い手は、まるで水仕事をしないお金持ちの若奥様のようだ。それに比べて、私の浅黒くて骨っぽい手は、そこで働く子持ちのメイドの手だ。自分をかわいそうだと感じると、姉さんと一緒にいる幸せはなぜかあっという間に増していく。(44頁)

興味／無関心、能動／受動、好き／嫌い。ミカドとまりものやり取りは、同性であるにも関わらず、タイプが正反対のカップルのやり取りのようでもあり、自分自身との比較により対照的に生み出されるミカドへの羨望は、自己を客観視する視線の介入とセットである。実は、「見る」主体の物語は、自らを「見られる」客体とする物語と表裏一体なのである。

姉さんが私を拾ってくれたのは、二月の、わりと暖かい日だった。そのころの私は一年も通わなかった大学を辞めたばかりで、そのせいで地方の両親ともごたごたして、住む場所さえ危うくなっていた。かといって建設的なことをする気分にはなれず、毎日夕方近くに起き出しては、当時のアパートの近くにあったミカド姉さんのお店で時間をつぶしていた。(48頁)

ミカドとの出会いは半年前の出来事として回想される。大学を辞めたまりもが、すべきことも見出せず、ただ時間つぶしのための読書の場として利用していたのが、ミカドの店であった。

彼女と目が合うと、私はなんだかばつが悪くて、すぐに視線を落としてしまうのだった。

ミカド姉さんのことを、きれいな人だとは、思っていた。それからなんとなく、いやみな人だとも、思っていた。悪い女だと、女に嫌われる女だと、すごくセックスが上手そうだと、とんでもない局面で人を裏切る女だと、私のことを小ばかにしている頭の悪い女だと、思っていた。

ただ、うかつに目を合わせたら、私のような考えなしはすっかり彼女の虜になってしまう気がして、それをどこかで警戒していた。(48頁)

ここで回想されるミカドへの印象は、自身の容姿コンプレックスや性的経験の無さ

と対比することによって生み出されたものだ。「きれい」と「セックス」をめぐる評価を除けば、ほぼ否定的に語られていた印象は、半年後には見事に反転している。だが、評価の内実はともかく、ミカドへの評価は、出逢った時から常にまりも自身の自己評価の反映（反転）である。

しかし、少なくとも出逢ったときのまりもの視線は「本」にあった。まりもは「読む」人だったのだ。それは、もちろん「目を合わせ」ることへの忌避という面もあった。だが、まりもはミカドを「見る」ことが全く違う世界への誘惑であることに気がつきながらも抗うことが出来なかったのだ。

ラカンが、自己のイメージの取得の過程に他者の像を「利用」する段階を「鏡像段階」として理論づけたことは有名だが、常に「反転」として意識されるミカドと自己像の関係は、ある「外部」の出現までは、まさにこうした状況下にあったと言える。ここで、欲望発生の原理として措定した説明概念である「対象 a」の説明において、最もラカンが拘り続けたものが「眼差し」¹⁾であったことを想起してみたい。

あーあ、もうこんなの何べんも読むもんじゃない、今度古本屋に行って何か新しいのを買いたいけれど、もう貯金も底をつくし、お母さんに電話するなんて考えるだけで鳥肌が立つ、なんて、雑念も交じってたらだら読み進めるうちに、すっかり意識が遠のいた私はテーブルにうつ伏してそのまま眠り込んでしまった。しばらくそうして眠った後、肩に心地よい揺れを感じた。次の瞬間にはいやだ、まずい、と思うあの感じ、絶対遅刻しちゃいけない試験の朝の目覚め方で私はがばっと起き上がった。最初に目に入ったのは姉さんの腰に巻いてある偽真珠の細いチェーンだった。私はきっと泣きそうな顔で彼女を見上げた。(49頁)

こうしたミカドからの誘惑を精神分析的な枠組みで捉えれば、この場面は象徴的である。現実の「お母さん」は拒絶され、まりもは一度眠りに落ちる。再び目覚めた時、まりもは「泣きそうな顔」で彼女を「見上げ」る。まるで、「母体回帰」して再び生誕した人間の様に、まりもは、新しい「世界」で新しい「母」を得る。この「母」は、失った母の「代理」であるが故に、永遠にまりもを「誘惑」し続ける。

姉さんの突然の申し出に私はじゅうぶん戸惑った。ところが、断る理由なんてどこにもないのだ。私はその五分後に姉さんの助手としてその喫茶店で働くことを決め、姉さんは店の奥からとってきた部屋の鍵を私に渡した。その薄汚れた華奢な鍵には、civet という五文字がうっすらと彫ってあった。(51頁)

新しいまりもの住処は「civert」という。この物理的に隠された店名は、シベット＝霊猫香。香料として使われるジャコウネコの分泌物である。香料として使用する場合には、エタノールに溶解させて不溶物を濾過して除いたチンクチャーとして用いる。これは強い糞様臭を持つが、さらに薄めると心地よい香りとなる。霊猫香はつけた香水の香りを長持ちさせる保留効果があり、また花の香りをより花らしくさせる効果が

あるため、香水に使用される。古代においては媚薬として用いられており、クレオパトラが体に塗っていたとも伝えられているものだ。

「薄汚れた」表面に「うっすら」と刻まれる文字は、まりもが文字を「読む」世界から離れつつあることを暗示しながら、薄まってゆく「civert」の香は、現実を「見る」世界に、まりもを導いてゆくのだ。

2、客体としての「向かいの人」あるいは主客反転の物語

むろん、「向かいの人」も、まりもにとっては性的な意味を持っていた。

向かいの部屋には今日もあの女の子が来ているようだ。この人たち、付き合いはじめて、これからいろいろ発展していくところならいいのに。まだキスもセックスもしていないで、その初めての瞬間を、私が目撃できればいいのに。二人は並んで、私からは見えないところにある壁際のテレビを見ているようだった。胸から上の輪郭が、ほんやりカーテンに浮かんでいる。行け、押し倒せ、私は懸命に声にならない声援を送ったのだけど、どうしても届かず、煙草を四本吸い終わるころにも二人は時々健全な笑い声をあげてテレビを見ているままだった。

(29頁)

水島に「初めてのとき」と声を掛けられ顔を赤らめているまりもには、性的な体験がない。向かいの人には「初めての瞬間」を「目撃」したいと思い、隣のミカドの性行為の「きれいな声」を「聴こう」とするまりもは、他者を媒介として、性的なものを擬似的に追い求めようとする主体である。このとき、逆に言えば、「向かいの人」や隣のミカドは、性的な客体となっている。

姉さんの声は段々大きく、切羽詰まって行って、最後に悲鳴のような高く澄んだ声をあげると、何事もなかったかのような静寂が一気に訪れた。私は自分の子宮がぎゅっと縮こまるのを感じた。

(31頁)

また、この二つの性的な客体は、男性と女性それぞれの位置を主体であるまりも自身に「転移」するための対象としても機能している。ただし、女性であるまりもが女性であるミカドに仮託するのみではなく、「向かいの」部屋のカップルには、男性を中心に仮託している点に、この「見る」主体の両義性がある。

感情のやり取りなんか、面倒なことは一つもない。テレビのニュースを見るのと同じだ。画面の向こうで何が起ってようと、私に何も与えてくれないし、私のほうだってそこから何か受け取るつもりもない。

(32頁)

だが、「見る」「聴く」「除く」といった行為は、少なくともまりもの意識上では、

性的な意味も含めて、何かを得る行為を意味していない。

レースのカーテン越しの彼を、私はひたすら好奇の目で見ていた。見ず知らずの他人がそこに存在して、私のいないところでもその人なりに生活している。これが人間の生活なのだと、好奇心を満たしつつも、私はどこか冷めた視線で窓の中を見つめていた。彼が窓辺に近づいてカーテンをめくる気配を感じると、私はすぐにベランダの陰にしゃがみこんで、息を潜めるのだった。(32頁)

事後的な位置から語る語り手は、客体から性的な感覚を得ていることに気がついていいる主体と、客体から何も受け取っていないと思っている主体を並列させ、アイロニーを発生させている。さらに、「私のいないところ」でも行われている姿を「人間の生活」と呼び、それを「見る」ことを欲する主体は、自己を消去させた視点（神の視点）を希求するなど、物語は近代的「主体」のもつ多くの矛盾を露呈させている。

その意味では、この主体は、以前の「読む」主体と近い位置にあるとも言える。読む行為とは、少なくとも物理的には、客体世界の外部にあると言えるからだ。内面的（精神的）な部分を別にすれば、読まれる世界と読む世界とは直接的には、ほぼ不可侵である。逆に考えれば、だからこそ、現実世界にいる物語の主体は、「外部」を求め、ただ「見る」だけの主体としてだけではなく、「見られる」ことをひたすら拒絶し続けようとするのである。

ベランダに置いた小さな椅子に腰掛けて、アイスクリームをなめるように、私は煙草を吸った。彼女と彼は、また奥の部屋で何か作っているようだ。今日の夕食。おめでとう。こうやって覗かれていることなんか、つゆ知らずに。私も相当お腹がすいている。どんなふうに見えるだろう？ 今の私とこの人たちを、上から見たら、どんなふうに見えるだろう？ つかの間惨めな気持ちになる。気付いたら煙草の火が指先まで迫っていた。熱い。カーテンの向こうでお皿を運んでいる彼女と、一瞬目が合ったような気がした。(42頁)

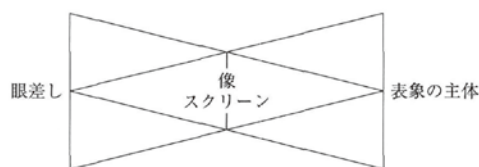
しかし、一方でこの主体は「見る」自分自身を「見る」視点も有している。「見る」主体は、世界を構築する視点であり「見る」もの全てを自在に解釈できる存在である。さらに、その世界内においては、自分自身が解釈の対象となることから逃れ続けることも出来る。だが、ひとたび自身を客観視した瞬間、それまで解釈されることがなかった特権的な位置は奪われてしまう。

たしかに、物語上では、そんな「惨めな気持ち」を打ち消すように自己を見つめる視線はすぐに消え去ってしまう。自己の内面を語るまりもにとってのそれと同じ様に、過去を語るまりもと語られるまりものアイロニーも、読者にとっては波間に浮かぶ僅かなものでしかない。だが、決して消え去ることもないのだ。読む主体（読者）であっても、見る主体であっても解釈に「他者」の「眼差し」が介入する限りにおいて。

サルトルは、『存在と無』²⁾において、「私はまさに、他者が眼差しを向けて判断し

ているこの対象である」ということの承認であると、「恥辱」を定義づける。また、「もし誰かが私に眼差しを向けているならば、私は対象であるという意識をもつ。けれどもこの意識は他者の存在のうちに、また他者の存在によってしか、生じない」とも述べる。このサルトルの「恥辱」をラカンは、『精神分析の四基本概念』³⁾でとりあげ、議論の俎上にあげている。ラカンにおいてもサルトルと同様、主客の間に介入し、客体を見る主体という存在に気がつかせるものとして「他者」を召喚している。まりもが他者の視線を徹底的に避けようとするのも、この文脈において十分理解できる。

だが、ラカンの眼差しの議論では、もう少し別に興味深い議論がある。ラカンは、サルトルの『存在と無』での議論に加え、メルロポンティの『知覚の現象学』⁴⁾などの検討を通じて、全ての「絵においてはつねにまなざしという何かが確実に現れる」という有名なテーゼを提唱する。風景画にも適応しようというこのテーゼは、キャンバスに乗せられた絵の具の集合体である物質



ラカンによる「眼差し」の図

に過ぎないものを、何か別のものとして捉えようとする、我々の絵画への鑑賞態度を考えてみるのが理解の端緒となる。実は我々は絵画自体を見ているのではないのである。絵画をみるということは、絵画を見ているという自分自身の認識が不可欠であり、その意味で絵画とは、それを見るものの存在を教えてくれる「眼差し」であると言うのである。

同書でラカンは、狩りや漁といった実践に憧れ、漁師たちとともにブルゴーニの海に船出したエピソードを語っている。そこで、波間に浮かぶ缶に対して、「あんたあの缶がみえるかい。あんたはあれが見えるだろ。でもね、やつの方じゃあんたを見ちゃいないぜ」という友人の冗談をラカン自身は、面白く感じられなかったという。それは、ラカンにとっては波間の缶はこちらを見ているし、その缶が結局漁師などにはなれず缶詰の消費者にすぎない自分自身を教えてくれるものとして現前していたからだというものだ。

こうした議論から、ラカンにとって眼差しを投げかけるものを見ることは、相手の眼球自体はもちろん、その姿を見ることですらないことが理解される。それは、自己を見る他者を発見することであり、同時にその他者が見る自分自身という存在を発見することに他ならない。他者の目は、自己像の根源であるが、目の向こう側に自己に関する何かしらの存在があるわけではない。むしろ、自己像は、物理的な他者の目のこちら側に存在するはずであるが、それは自分自身には見えない。自身に感じられるものは、自己を認識する他者の存在と、そこから想像（創造）される自己像であり、ラカンは、それを比喩的に「スクリーン」と呼ぶ。

ラカンの理論は、現理論的には全ての客体は主体に対する眼差しを有し、主客の位置を反転させるとも普遍化できるかもしれない。だが、ここでは、物語の中で、なぜ

まりもがミカドの「目」に惹かれたのか。そして、その瞳を見返してしまった日より、何故まりもがミカドへの憧れの呪縛から逃れられなくなってしまったのかを、ラカンの指摘は雄弁に語っている。そして、この指摘において何よりも重要なことは、他者の眼差しの発見は、実は「恥辱」ともなった自己発見への回路であるという点である。再び、物語に戻ろう。

3、見ないで感じる「主体」あるいは「主体」を消す物語

タイトルにある「灯」という語彙から我々は、この物語を視覚をめぐるそれとして捉えがちである。またピーピングトムが語る物語内容も「見る」または「覗く」物語に読者を導きがちである。

だが、基本的にこの物語にとって、「夜」や「闇」とは、見る主体を消去し、一方的に見る主体であることを保障するものであり、結果的に他の感覚を鋭敏なものに変えてゆくものである。

真夏の本屋は、行き場を失った人たちでいっぱいだった。

あたり一面、新品の紙とインクの潔癖な匂いがして吐きそうだ。まだ古本屋のかび臭い湿った匂いのほうがまし……本屋なんて随分来てなかった。店から少し歩いたところに、大きな看板の割と広い本屋があるのだけど、大学を辞めたあたりからどうにも知的な匂いのするものに鳥肌が立つようになって、特に本屋とか、図書館とか、本と人しかいないあの神聖な空間に足を踏み入れるのはとても気力の要ることだったし、そういう建物のほうでもあっさり私を拒絶しているように思えた。

(70頁)

「灯」という「見る」対象は「本」の代替であり、それは「夜」が夏の強い日差しの中の「昼」と対置されることと、相同的な関係をもっている。活字を読むには、周囲の光が必要であり、窓の灯を「覗く」には、主体の周囲の光は邪魔な存在でしかない。また、「本」やそこから連想される「知的な匂い」は辞めてしまった大学と同一性があり、それこそが、まりもが断ち切ってきた世界であったと理解できる。

なんとなくつかまった手すりは、古くざらざらしていて、さすると赤い錆がぼろぼろ落ちる。私はポケットに手を突っ込んでお店の脇の道に出た。西の突き当たりにある公園の林の向こうに、オレンジ色の太陽がどくどくと沈んでいく。昼間の熱気がまだそこいらに冊まっけていて、息が詰まりそうな蒸し暑さだ。

(20頁)

さらに、ここで語られている錆びた「手すり」の質感や、真夏の熱気を肌で感じる身体感覚は、まりもの世界の感じ方として繰り返し描かれている。

道を挟んだ駐車場で姉さんが飾り用に育てているミントの葉っぱが、熱っぽい風に頼りなく揺れている。私はふらふらと道を渡し、顔をうずめるようにしてしばらくその匂いをかいだ後、手に触れた柔らかい葉っぱをむしりとった。通りには誰もいない。頭がどうにも重くなって、額に手のひらを当てたまま道を引き返し、お店の階段を上って行った。(21頁)

駐車場のミントも、「匂い」という嗅覚的な面や、それを掴んだり触れたりする触覚を通じて描かれている。

二階にある私の小さな住み込み部屋は、ドアを開けたとたん腐った卵の匂いがした。シンクの隅で、昨夕ミカド姉さんが食べ残したゆで卵がもう腐っている。昼から窓を閉め切りにしているせいで空気は外以上に濃く、重かった。息を止めてとってきたミントを流しにばら撒くと、そのまま台所をつきあって寝室の窓を開けに行く。向かいの窓からギターの音が聞こえる。まだ外が明るく、部屋は暗いので、いつものようにカーテンの奥は見えなかった。あの子が来ているのかもしれない、と思う。(21頁)

さらに「視き」の客体となる窓においてさえ、視覚的なもの以上に、そこから聴こえてくる「ギター」や「笑い声」などが繰り返し描かれており、まりもの感覚は必ずしも視覚優位の世界であるとは言い切れない。むしろ、「闇」により自身を消去させた主体は、あらゆる感覚を鋭敏にした、感じ取る主体なのである。

「うるさい鳥」

私がそう眩くと、姉さんは、

「みんな生きているんだから」

と言って、缶ビールをぐいと飲んだ。

「本当暑いわね、この部屋。カーテン開けない？」

「向かいの人に見えちゃうよ」

「あら、そう」

(24頁)

また、こうした視覚以外の感覚の基底にも、まりもの持つ「視」く主体であっても「視」かれる客体にはなりたくないという意識があることは重要である。視覚の遮断を象徴するカーテンは、蒸し暑い部屋の中で快適さを犠牲にしてまでも開けられることはない。

「ねえ。音楽かけない？」

彼女は私の古いCDラジカセをベッドの下から引きずってきて、電源を入れた。ジャニス・ジョプリンのかすれた太い声が部屋の中に響き始める。

それは、姉さんの一番若い恋人が彼女にあげたつもりになっているCDだっ

た。

(25頁)

たしかに、カーテンにより視覚は遮断されたが、聴覚優位となった部屋で、まりもは、今度は鳥の鳴き声に対して不快感を露にする。ここで「みんな生きている」とミカドに嗜められるのは、後に覗かれる客体に対して「生きている」と評するまりもの台詞を考えると興味深いが、少なくとも、この時点のまりもにとっては、「見られる」ことと同じように、「聴こえてくる」ことは不快なのである。これは、視覚／聴覚の問題というよりもむしろ、能動＝見る＝聴く／受動＝見られる＝聞こえるという問題であると考えられる。まりもにとって受動的な感覚は忌避される対象であるようだ。

不快かつ受動的なサウンドスケープの中で、ミカドが替わりに選択するのは「ジャニス・ジョプリン」のCDであり、この行為はミカドのまりもへの気遣いであるともとれる。しかし、ミカドの恋人の一人にプレゼントされたこのCDは、まりもにとって、ミカドの他者に対する徹底的な無関心を象徴するものである。結果ミカドの気遣いは、まりもの食欲を奪ってしまう。

姉さんの無頓着なまでの寛容さは、いつだって興味と羨望の対象だった。姉さんは一人一人にすごく誠実で、割り切っていて、平等で、そのとき持っている優しさは全部あげてしまうように見える。ただ、それは誰のことも決して特別視しないということだ。おそらく、私だって。それでいっそう、私の好奇心は恥ずかしいぐらい彼女に向かって膨れ上がる。

(28頁)

しかし、こうした無関心な態度をまりもは「無頓着なまでの寛容さ」と呼び、「興味と羨望の対象」と捉える。ミカドはまりもの言葉や行動に対して、確かに無関心ではあるが、それは「平等」でもあるというのだ。一見、まりもの評価は、男たちの視線と近いものがあるように感じる。しかし、「姉さんの虜」になってしまう男たちは、自身と他の男を「平等」であるとは捉えていない。もし、そうであれば、まりもは男たちを「滑稽」であるとはみなせないだろう。

そして、この無関心である態度は、ミカドに対する強い関心が「恥ずかしい」という形で、まりもの中に内面化される。サルトル＝ラカンの文脈に従えば、ミカドとは、「恥辱」を発生させる他者であり、再び物語の文脈に立ち戻れば、そこで見出されるまりも自身は、常に否定したいような自己像である。

以前酔っ払った姉さんが自分の部屋に戻らずに私のベッドで渡っていたとき、私は眠っている彼女の白いふくよかな二の腕に触れたくてたまらなくて、指先でそっと、本当にそっと、その柔らかい肉をなでてみた。彼女が目を覚まさないのを確認すると、今度は思い切って手のひらでぎゅっと掴んでみた。姉さんの腕はたくましくて、ふわふわとしていて、どことなく甘い匂いがした。私はきっと、あのおじさんたちと同じところから彼女を見ている。それでもいい。私はあの人たちが知らない姉さんを、きっと知っている。

(28頁)

視覚的な面のみならず、触覚や嗅覚まで動員したミカドへの執着は、まさに男性の性的な位置であるが、彼らと同じようにミカドを性的な対象として捉えているわけではない。そして、自身を含めて全ての他者に対して「平等」であるミカドの有り様を、「あの人たちが知らない姉さん」と捉えることで自身の位置の「特権性」を保持している。男たちは、まりもにとって、代替可能な存在であると同時に、自己の位置を保証するのに不可欠な存在でもあるのだ。

だが、この自己像は、否定的なものである以前に、それが鏡像段階的なものである限りにおいて、まりもにとって単なる呪縛にしかない。まりもにとって必要なのは、自己発見のための第二の「他者」ではなく、鏡像段階を抜け出すための、第三の「他者」の介入だったのだ。

4、特権的な位置の代替あるいはそれを奪う物語

物語に主として登場する客は、「水島」「小宮山」「先生」である。

彼（水島～引用者注）は、姉さんの見事なまでに平等な笑顔と、その前に座るおじいさんをにらみ付ける。それからあからさまなため息をついて、カウンターの一先端にいかにも大儀そうに腰掛けた。小宮山さんは思わぬ邪魔者にさっきまでの雄弁もどこへやら、すっかり黙ってしまったので、店の中は不自然に静まり返った。

(40頁)

水島と小宮山は、性的関係の有無、情人／父親など、ミカドを媒介として対称的な関係にある。だが、まりもから見れば、「好きではない」「信用ならない印象」とともに低評価の男たちである。だが、まりもにとっては、両者が一括りに同じ様な評価であることが、後に会うことになる「先生」との明確な対比構造を生み出している。

「なんで？ 先生って、お店に何しに来るの？」

姉さんは私の顔をまじまじと覗き込んだ。

「教えてあげない」

「なんで」

「内緒……」

「ふーん」

私が興味なさそうにお茶をすすっているのが姉さんにはつまらないらしい。

電話をかけに赤い頬で外に出て行った姉さん。あのときの違和感が現実味を増して目の前に戻ってくる。

「ちょっと、あんた、あんたは淡白すぎるわよ。もうちょっと人の話を聞きなさい」

(54頁)

これまで繰り返された来た、窓の青年の話をするまりもとそれに無関心なミカドと

いう構図に対し、「先生」の話をするミカドとまりもの関係は、完全に反転している。まりもの「裏切られたような気分」は、いかようにも打ち消すことが出来ない。

「先生」のせいで中学生みたいに浮かれていた姉さんに対するぎょっとするほど冷たい嫌悪感は、カツ屋を出てからもなかなかひとところに収まらず、じっくり腰を据えて分解してみようという気にもならなかった。明日やって来るという「先生」に早速いらいらしながらも、私は興味を持たずにはいられなかった。「先生」その人よりも、誰にも執着しないはずの姉さんと彼の関係への興味だった。そういう二人のために、私は早起きをして、窓を磨くのだろうか？ 探るように向かいの暗い窓を見ている、何もわからない。(56頁)

自分自身の手にもあまる不思議な感情に覆われたまりものは、その夜から街中を徘徊し様々な家を「覗き」廻るようになる。暗闇の中、覗く主体は世界から消え去り、ただ覗かれる客体だけが存在するような世界。だが、暗闇の中で繰り返し描写される様々な「音」は、消去されたはずの主体を容赦なく呼び戻してしまう。

そうやって、なんでもなし生活を、私なしでも息をして淡々と暮らしている人々を見てまわった。ミカド姉さんの顔に少しずつ広がっていった先生の影を消すために、私はいくつもの新しい影を探した。

何者にも執着しないミカドであるからこそ、それが他者として現出し、ミカドに執着せざるを得ない自己を「羞恥」の感情とともに認識する。ミカドが「執着」する「先生」の存在は、これまでの対象 a (スクリーン) としての存在であるミカドを、別の存在に変えてしまう。むしろ、これは単なる対象の変化ではなく、そこから構築されていた自己基盤の崩壊も意味する。

今後繰り返される「覗き」は、先生の「影」の代替を求める行為であるが、それは代替であるがゆえに、ラカンの語彙を使えば「対象 a」であるがゆえに、欲望としては消え去ることなく続いてゆく。

うつむく姉さんの、薄い、白いブラウス。第二ボタンまで開いた胸もとが、つやつやして見とれてしまう。ボタンの隙間から薄紫のレースの下着が見える。女の人ってこういうものだ。姉さんは今日イヤリングをしていない。毛先があちこちを向いた黒い髪の中に、その小さな耳がぼつりと露出しているのを見て、私は突然心もとなくなった。姉さんは珈琲の上にクリームを絞って、先生に差し出した。(68頁)

「先生」によって、ミカドはより一層「女の人」として浮かび上がることになる。だが、ミカドに見出される耳が、まりものを何故か突然「心もとなく」させる。ここで、まりものが垣間見た耳とは、恐らく対象 a としてのミカドに見出してしまった「穴」である。

「先生」の存在は、徐々に最終審級であるミカドの位置を侵してゆく。

私や他のおじさんたちがびくびくしながら覗き見ている、そうじゃなかったらべろで舐めあげるみたいに凝視している、ふとした瞬間の姉さんの後ろ姿を、先生は一度もそんなふうに見なかった。先生は、彼女がその視界からはずれても決して後を追わず、まるで最初からこの世にいないというふうにもどかしいほど無関心なのだった。先生はどこか姉さんと似ている。そんな先生を、私は好ましいと思った。(69頁)

一方で、「先生」の出現は、他の男たちにとっては、いわゆる「父」の「介入」である。「平等」ではあっても、ミカドの視線は、それぞれの男にとっては鏡像関係の中にあつた。しかし、「先生」と一緒に居るときミカドの視線は「先生」にあり、「先生」は、その視線をミカドには向けない。「見られる」ことを気にしない客体は、「見る」主体となり、新たな客体は、ミカドを奪い、他の男たちをも排除してゆく。

だが、それを見つめる位置にあるまりもは、アンビバレントである。まりもが嫌悪する男たちを一気に相対化する点において、「先生」はミカドと同様かそれ以上の存在である。また、「先生はどこか姉さんと似ている。そんな先生を、私は好ましいと思った」と、まりもは、他を寄せ付けぬ両者の間柄を一つにして、ミカドと同じ憧れの眼差しで見ている。

向かいの部屋の窓に、先生と姉さんの横顔が見える気がする。映写機のように、今日見た先生の断片が窓に映っては消え、消えては映る。それを消すように、姉さんの白いブラウスや、何もついていない裸の耳たぶがくっきりと浮かび上がってくる。ミカド姉さんと先生、今、あの二人は何を話しているんだろう。ほんやりとした二人の残像と入れ違いに、そんな疑問が頭をかすめる。(69頁)

だが、代替行為として続けられる「覗き」の「スクリーン」(カーテン)には、先生の残像とともに、ミカドの「ブラウス」や「耳」が浮かぶ。これが、向かいの窓の男女とまりもの間にある「スクリーン」であることを鑑みても、そこに性的想像が介入していることは間違いなく、さらにまりもを頂点とするいずれの三角形からも、見る主体としてのまりもは、客体から「排除」された位置に陥ってしまう

「先生、この子まりもです。お手伝い」

先生の切れ長の目がじっと私を見据える。なんでも知ってそうな、人の浅はかさはすべて見透かしてしまいそうな、私が今まで見てきた中で一番冷静な瞳だった。

(中略)

私は返す言葉を知らず、助けを求めるように姉さんの顔を見た。姉さんはただにこにこしている。私は何も言えない。それがすごくすごく恥ずかしくて、逃げ

るように奥の厨房に戻った。

(67頁)

一方で、ミカドがその瞳によってまりもを魅了したように、先生の切れ長の「目」がまりもを捉える。そして、何も言葉を返せないまりもに生じた感情は、やはり「恥」であった。先生は、ミカドの代替としてまりもを魅了すると同時にまりもとミカドの鏡像を破壊する存在でもあった。

隣の部屋のドアが勢いよく開き、高いピンヒールが階段を駆け下りていく音が聞こえる。カンカンカンカンカンカン、容赦なく、乾いた階段、錆のぼろぼろ落ちるみすぼらしい階段を刺す音。私はうつ伏せになり、いっそう強く目をつむった。

(78頁)

「いつもよりずっといい匂いがする」ミカドの様子から、先生とミカドの仲は深まってゆくように感じながらも、まりもが二人をその視界の中で捉える機会は徐々に減ってゆく。それに伴うように、向かいの窓からは、「下手なギター」が聞こえて来るようになる。「何かとてつもなく偉大で、寛容で、力を持っているもの、そんなものに助けを請うような」まりもの気持ちを、窓の音は救えない。まりもは、徐々に向かいの窓への興味を失い、何かの「影」を求めつつ、夜中の街を徘徊する。

その夜も私は散歩に出た。姉さんはまだ帰ってきていない。若干の息苦しさを感ただけで、夜の風の心地よさにすぐに体は緩んだ。姉さんたちはどこにいるんだろう。夢遊病者のようにドアからドアへ、窓から窓へ。遅い夕食の妙め物の音、シャワーのお湯が跳ねる背、洗流機が無骨に回る音、映画の叫び声、それらの空白を埋める夜の蟬の声。

(80頁)

(中略)

どんなに覗いても、私はもっとその奥にある何かを見たがった。つまらなくなれば、新しい窓を探す。オレンジや白の灯の下で、のっぺらぼうのように暮らす人たちを覗き続ける。

(82頁)

深夜の街でまりもに見出される感覚的なものすべては、先生の代替である。だが、代替であるがゆえに、その欲望は留まることを知らない。さらに、従来からのミカドへの欲望も、まりもの中で決して消え去ることはない。

この鏡に、彼女はどんなふうにも映るんだろう。私のまだ知らない姉さんの一部が、この部屋にはいくつも散らばっている気がした。私は鏡台の上の化粧瓶を手にとった。一つずつ、試験管を扱うように、振って、開けて、匂いをかいでいく。ひときわ背の高い瓶に手を伸ばすと、その後ろに小さな四角が転がっていた。写真立てだった。金色のフレームはごつごつして、ひんやりと冷たい。

(97頁)

ミカドの部屋にある鏡に映るミカドの姿、若い頃のミカドの写真、ミカドの部屋の窓からみえる風景、部屋に散らばる様々なミカドの所有物。こうしたもの全てにまりもは惹かれながら、そこからは、すぐに別のミカドの姿が浮かび上がり、新たな欲望を生み出し続ける。こうした欲望の連鎖に絡め取られたまりもには、外部など容易に見出せなくなっている。

そんな日々の中、偶然の出会いにより、まりもは「覗き」行為を先生と共にすることになる。

先生も同じ窓を見ていた。私が立ち止まると、彼も立ち止まった。

「生きてるって、感じがしませんか」

私はそれまで思ってもみなかったことを口に出した。言葉は宙に浮いて、いかにもでたらめくさく聞こえた。

「誰が？」

窓の女は突然向きを変えて部屋の中に入った。

「あ、行っちゃった」

振り向くと、彼はまだその窓を見ている。

「あの人が……あの人がちゃんと生きてるなって思いませんか」

「……。」

「人間って、思うほど動いてないんです。みんなじっとしてて。急に動くと、急に人間らしくなって」
(85頁)

同じものを「見る」二人だが、二人の眼差しは最後まで交差することはない。「覗く」客体から主体の「生」を知るというまりもの感覚を、先生は最後まで理解しない。先生は「見る」ことのない主体、あらゆるものに対して執着して見ることのない主体だからである。

5、弾き出された客体 あるいは 主体獲得の物語

遠くで酔っ払いの叫び声が聞こえて、私たちは飲み屋街の方向を振り返る。叫び声はすぐに笑い声に変わり、調子はずれな大合唱がたちまち静かな街に響き渡った。

「あの人たちみたいになれればいいけど」

先生は口元だけで笑った。
(86頁)

物語に繰り返し登場する「笑い」。だが、ミカド、先生、まりもの三者にとって「笑い」は、コミュニケーションの遮断でしかない。これは、うまく笑えない人々の物語でもあるのだ。だが、客体が自己発見の起点であることに、無関心の先生が気づくはずはなく、またミカドにとって先生は永遠に他者にはなり得ない存在なのである。

確かに、鏡像関係から弾き出されたまりもの場所は、限りなく続く欲望の連鎖であった。だがその場所は、たとえ代替であったとしても、自己を自己として見出し得る唯一の場所であったとも言える。

向かいの彼への関心は日々薄れていく。それよりも、もっと想像のつかない、助けとなるような、私の知らない誰かの幸せと不幸せを見たいと思った。きっと、私は抜け出したかったのだ。ミカド姉さんと先生の影は壁のように私の周りを取りまいていて、毎日少しずつ距離を詰めてくる。あてずっぽうに石を投げて、その向こうが見える穴を作りたかった。(94頁)

語りの位置からは、自身の当時の気持ちが相対化されている。まりものが開けたかった「穴」は、外部に通じる穴。己の世界を崩壊させても新たな世界へ抜け出すための「穴」に他ならない。

だが、この穴は残念ながらミカドと先生の外部には存在しなかった。両者の空間からの疎外感を抱くまりものは、ついに両者の「鏡」を傷つけようとする。それは、「言葉」によってであった。

「姉さんて、ずるいよ。何人も、あんな汚いおじさんを部屋に連れ込んでおいて、どうしてそんな顔で笑ってられるの？ 毎晩娼婦みたいなことしてるくせに。先生は知ってるの？ 言わないで、先生にだけいい顔するなんて、ずるいよ。一人で舞い上がっちゃって、ばかみたい」(188頁)

(中略)

「姉さんは先生の思っているような人じゃないですよ、ちっとも、そうじゃないのに、先生みたいな人は姉さんには何人でもいるんですから、自分だけ特別ななんて、思わないでください。姉さんに特別な人なんて、いないんだから」

(189頁)

しかし、このまりもの二つの「言葉」は、ミカドにも先生にも、「穴」はおろか何の「傷」を与えることすら出来なかった。むしろ傷ついたのはまりも自身だけだったのである。だが、二人を傷つける「言葉」の獲得は、「言葉」が通じない他者として、それを「受け取る器官がすっかり抜け落ちている」存在として、自己の外部に二人を放擲してしまう。残るまりものは、自己を傷付ける言葉の世界(象徴界)で、ただひたすら「代替」を求め続けるのみである。

目の前にはいても、この人たちはどこか遠いところにいる。投げつけた言葉からこぼれる私の気持ちは、むなしく宙に浮かんで、誰にも掴んでもらえないまま消えてしまう。この人たちはいつだって見て見ぬふりだ。そう思うと、急に二人の姿が作り物みたいに見えて、背筋がすっと冷たくなった。(110頁)

「作り物」のように見える二人は、まりもにとって二度と自己を映す「鏡」とはなり得ないだろう。己の「言葉」によって傷つけられた自己を、果たして自身で救出し得るのだろうか。だが、他者を傷つけようとした「言葉」は、逆説的に、傷ついた自己を発見した。この自己は少なくとも何の写像でもない自己ではある。

額に手をやると、かすかに指先からミントの匂いがした。一瞬、散らかした。ミントの中で突っ立っている自分の姿が頭に浮かぶ。結局私が見たかったのは、淡々とした人々の日常ではなく、無表情の下にある矛盾や、欲望や、悲しみでゆがんだ、ぐちゃぐちゃの醜い顔だったのかもしれない。(113頁)

痛み、触覚、嗅覚、聴覚。見えない世界の中でまりもは、受動的に感じるざるを得ない様々な感覚の中から、逆説的に自分を発見する。それは、見えない自分、あるいは見える他者の向こう側にある見えなかった自己の発見である。やはり、この物語は「覗く」＝「見る」物語ではないのだ。

今晚、私はそんな顔をしていただろうか。観察できたら、と思う。自分だけじゃなく、まんべんなく誰も彼も一度に見渡せたらいいのに。(113頁)

主体を消去して世界を見出そうとしてきた主体は、結局一番見たいと思うものを見ることができない。鏡像からはじき出された主体は、その代替を追い求めるしかない。あまりにもラカ的な物語。それは、絶望的な結末なのだろうか。

向かいの部屋に電気はついていない。レースのカーテンが夜風にかすかに揺れている。あの人、寝てるのかしら。そう思って目を凝らすと、カーテンの奥に人影が見えた。確かにそこに人がいる。

強い風が吹いて、カーテンが半分めくれた。私は彼の顔を初めて見た。食い入るように、姉さんの窓を見ている。脇目もふらず、滑稽なほど熱心に。

私もこんなふうに誰かを見ていたのだろうか。

そしてこうやって、誰かに見られていたことがあったのだろうか。(114頁)

向かいの窓の住人は、単なる見られる客体などではなく、同じものを見る主体であったという発見。これだけならば、まりもにとって先生も同様であった。

想像したら、小さな笑いがふき出した。彼は驚いてこちらに顔を向け、ベランダの奥で自分を見つめる小さな女を見つけた。

姉さんがまた一つ、小さな悲鳴をあげる。

私は立ち上がって、ゆっくり一礼した。

彼も、訳がわからぬといった顔で、一礼を返した。

そう、そうだ。わけないことだ。その気になれば、私はあの窓からだって手を

振ることができるのだ。

(114頁)

しかし、向かいの住人との視線の交錯は、自己の発見なのである。たとえそれが「スクリーン」上の自己にすぎないのだとしても、誰にとっても自己は「スクリーン」であるならば、誰だって「見る」主体になれるし、誰からだって「見られる」客体になることが出来るはずだ。

そして、主体が言語の「傷」として、かつ事後的にしか発見しえぬもののだとしても、それを癒すことが出来るのは恐らく「言葉」だけでは不十分なのだろう。眼差しの交差による承認の連鎖しかあり得ないのではないか。

まりもと向かいの部屋の住人。この二人の間に、言葉は存在しない。

注

※ テキスト本文の引用箇所は、初出誌と文庫本の間大きな改訂はない。よって引用頁は、河出文庫『窓の灯』（二〇〇七年一〇月）からのもので統一してある。

- 1) 番場 寛「サルトルとラカンにおける眼差しの理論 ——安部公房の小説と『正法眼蔵』の「眼睛」を参照して」『大谷学報』85巻、二〇〇二年六月
- 2) J・サルトル著、松永信三郎訳『存在と無』、ちくま学芸文庫、二〇〇七年一月
- 3) J・ラカン著、竹内芳郎・小木貞孝翻訳『精神分析の四基本概念』、みすず書房、一九六七年一月
- 4) M・メルロポンティ著、中島盛夫訳『知覚の現象学』、法政大学出版局、二〇〇九年一月